

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

【第20回】

市川哲

(立教大学観光学部プログラム・コーディネーター)

拡大するマレーシア華人の活動領域 東マレーシアからパプアニューギニアへ



「日本行きの飛行機にチェックインするには何時に飛行場に到着すればいいんだ。正午か。昼飯を作っている時間はないな。じゃあ出前を取るか。この近くに美味しいラクサの店があるんだ。電話してみよう。」

この会話がなされたのはマレーシアではない。パプアニューギニアの首都ポートモレスビーである。ラクサの出前を取ろうと言ってくれたのはパプアニューギニア生まれの華人である。彼にはマレーシア華人の親戚がいるわけでもないし、マレーシアに行ったことすらない。

なぜパプアニューギニアでマレーシア料理が食べられるのか。これは単なるパプアニューギニアにおけるエスニック料理ブームのためではない。マレーシアからパプアニューギニアに渡航し、生活する人々が近年、増加しているためである。このようなマレーシア人はサラワク州やサバ州の出身者が多く、特に華人が大多数を占める。シンガポールやタイ、さらにはオーストラリアにもマレーシア華人は住んでいるが、なぜパプアニューギニアに、しかも東マレーシア出身者が流入しているのだろうか。

広大な熱帯雨林が存在するサラワク州やサバ州では、林業が両州の主要な産業となってきた。特にサラワク州では華人系企業が中心となり、森林伐採と海外への木材輸出が活発になされてきた。だが1980年代以降、森林資源の枯渇や操業コストの上昇、さらには環境問題の浮上といった様々な問題により、域内での森林伐採が次第に困難になってきた。このような背景により、東マレーシアの華人系林業企業の一部は海外に新たな伐採地を求めようになったのである。そのため現在ではインドネシアやカンボジアといった東南アジアの他の国々はもちろん、南米やアフリカにまで進出し操業する企業も出てくるようになった。中でも国土の大部分を熱帯雨林が覆うパプアニューギニアは、マレーシア系林業企業の主要な進出先となっているのである。

また現在ではパプアニューギニアにおけるマレーシア企業は林業のみならず、様々な分野でも活動するようになってきている。その代表例がサラワクの華人系企業リ

ンブナン・ヒジャウ(Rinbunan Hijau 略称RH)である。RHは林業以外にもパプアニューギニア各地でハイパーマートの経営や物流関係のパプアニューギニアの首都にある華人がビジネスを展開



経営するレストラン

しており、さらには新聞会社まで立ち上げた。

このようなマレーシア系企業の従業員としてパプアニューギニアに流入した華人たちの中には契約期間の満了とともに、あるいは自ら退職して様々なビジネスも始める者も出てくるようになった。中でも特徴的なのがレストランの経営である。海南鶏飯や肉骨茶、ナシ・レマやミー・ゴレンといった典型的なマレーシア料理がパプアニューギニアの都市部で販売され、現地のパプアニューギニア人たちからも食されるようになったのである。

パプアニューギニアの華人がマレーシア華人の料理を食べる、ということ、我々はい、グローバルなレベルで展開する華人ネットワーク、というよくあるイメージで理解しがちである。だが現在のパプアニューギニアにおけるマレーシア華人のコミュニティと活動は、両国における環境問題や企業活動、都市における消費傾向といったレベルの異なる様々な要因の結果、誕生した現象なのである。華人の様々な活動は、単なるネットワークやグローバル化といった観点からではなく、もっと具体的かつ地域的な観点から理解する必要があると言えるだろう。

【プロフィール】1971年生まれ。立教大学大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員、国立民族学博物館機関研究員を経て、現在、立教大学観光学部プログラム・コーディネーター。博士(文学)。専門は文化人類学、トランスナショナリズム研究。華人の移住や社会組織、先住民との関係等をテーマに研究を行う。